

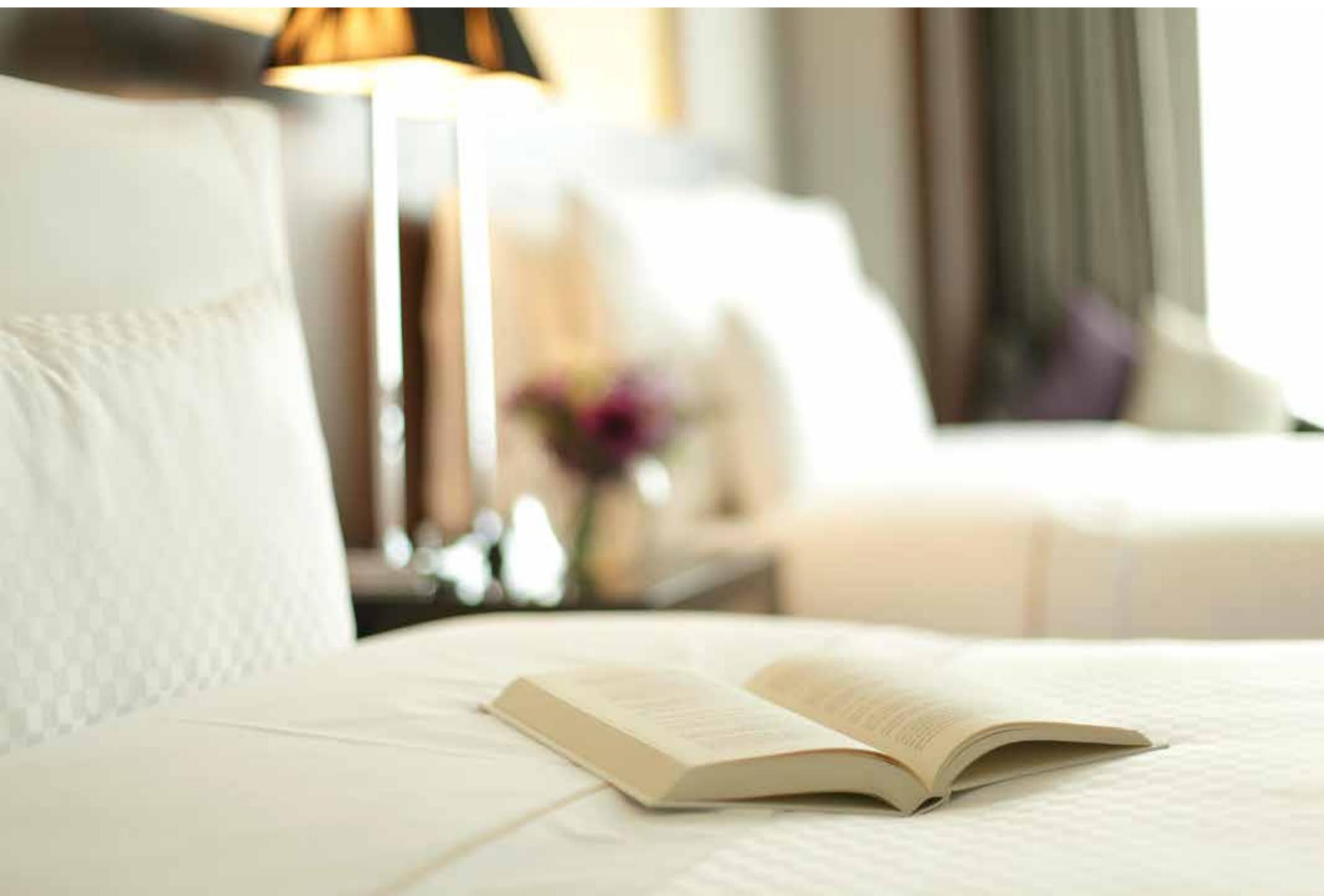
THE WESTIN

SENDAI

12ヶ月のブログリレー

わたしの仙台ストーリー

12月の旅人





- ・この地図は Google マップサービスを利用しています。
- ・地図内のルートは旅人の訪問地、訪問順に基づき、Google マップの仕様に合わせておすすめのルートを作成したもので、旅人が実際に使用したルートと異なる場合があります。
- ・当データからリンクしている Google マップページについては、Google の責任の下、管理されているものであり、Google に起因する不具合等について当ホテルはいかなる責任も負いません。



12月の旅人

空っ風太郎 様 [宮城県・男性]

小池真理子の『水の翼』に登場する老舗和菓子店など訪ねて、小説の追体験をしたい。



仙台は「トカイナカ」という言葉がぴったりと当てはまるような街である。東北一の都会であり、その人口一極集中は日本全体の東京に対するそれを上回る。山形市や福島市の人たちがわざわざ仙台に買い物に来るといふくらい魅力ある街である。それでいて街並みを少し抜ければ、他の東北の地域と同じような心休まる田園風景を楽しむことができる。

私も妻も関東の生まれであるが、いわゆる通勤族で、全国津々浦々を仕事で歩き、最終的に仙台が気に入って住むことにした。若い頃、東京で数年間仕事をしたが、何か東京の喧騒と薄汚さが肌に合わず、「人間至る処青山あり」というものの、遠く雪を頂いた美しい山並みが見えるようなところに終の棲家を得たいものよと漠然と考えていた。幼い頃に白黒テレビで見た、石坂洋次郎の小説を映画化した「青い山脈」のイメージが刷り込まれていたのかもしれない(古)。

縁あって仙台での仕事を得、職場の上司の「通勤族は特に、仕事に惚れ、土地に惚れ、人に惚れる」という『三惚れ』を实践せよ」という教えに素直に従い、仙台という土地柄、そこに住む人の人情に惚れて仙台に住むことにしたのである。

実はもう一つ決め手となったものがあつた。小池真理子氏の『水の翼』という小説である。その小説が与えてくれた仙台という街の落ち着いた美しい印象が少なからず私の決心を促した。

小池真理子氏は小説『恋』で直木賞を受賞した著名な作家で

あるが、その小説はしっとりとした官能的なものが多い。とりわけ受賞作『恋』を読んだ時には、年を重ねたために忘れかけていた切ない感情とともに、心が揺さぶられるような気持ちになったことを覚えている。小池氏は仙台に縁があり、『恋』や『無伴奏』を始め、仙台を舞台にした小説を幾つか著している。その一つが『水の翼』である。

天才的な木口木版画家の柚木宗一郎とその若く美しい妻紗江、そして東北大学の学生ながら柚木の創り出す木口木版の美に魅了され弟子入りしてきた寺島東吾。この三人の心模様、特に柚木が病死してから御霊屋下(オタマヤシタ：伊達政宗の墓所である瑞宝殿近傍)の柚木の家で暮らす未亡人の紗江と弟子である東吾の間に野火のように燃え盛り始めた恋愛感情が二人の心の葛藤を交えつつ描かれる。

今回、有難いことに仙台ウェスティンホテルに宿泊させて頂き、「仙台ストーリー」の12月分を担当するに当たり、再度「水の翼」を読み返してみた。時恰もクリスマスが近く、[定禅寺通り](#)には震災前と同じように煌びやかな「光のページェント」が繰り広げられている。そんな街並みを妻とともに散歩しつつ、小説で描かれた幾つかの場所を切り取って紹介したいと思う。

1日目「都会」の仙台を眼下に

まずは、旅の拠点であるウェスティンホテル仙台に到着。仙台随一の威容!!

12月 12ヶ月のブログリレー
わたしの仙台ストーリー



ホテル内もクリスマス一色に装飾。鮮やか！
ロビーにはお菓子を積み上げた可愛いオブジェが。
聞くところによると、子供たちが一つ一つ飾りつけをしたカップ
ケーキをクリスマスツリーに仕立てたものだという。



フロントでもロビーでも、従業員の方の笑顔がとても自然で感じ
が良く、思わず心が和んだ。また、英語でいえば「May I help
you?」というのだろうか?どの従業員の方もさりげなく、私がして
欲しいと思うようなことを尋ねてくる。心配りが有難い。

ホテルのロビーで感じたホワイトティーの香りが室内にも。この
統一感ある香りがホテルのホスピタリティーを代弁しているかのよ
うだ。室内は居心地の良い適度な広さ。ベッドもリネン類も豪華
で美しい。

アメニティーも充実していて、ここにも心配りが感じられる。ロー
ションやシャンプーもホワイトティーの香り。

窓からは仙台市内の絶景。はるか彼方に太平洋の白波が見え
る。パノラマのような眺望に暫く時を忘れてしまう。

夜は定禅寺通りの光のページェントを楽しむ。ホテル前のイル
ミネーションも負けてはいない。

夜の散歩を楽しんだ後は、いよいよレストラン「シンフォニー」
でディナー・タイム。



12月 12ヶ月のブログリレー
わたしの仙台ストーリー



アミューズはクスクスとズワイ蟹の和え物



前菜はほろほろ鳥のテリーヌ。
添えられたブドウのピクルスが珍しかった。



スッポンとキノコと卵のスープ。
柚子風味の生クリーム仕立てが美味!



メインの魚料理は、スズキのバター・ソテーと
四穀米のリゾット。



肉料理はビーフ・ステーキ。



締めデザートにはシナモン・アイスクリームとりんごのデクリネ
ゾン (ジャムのような食感)。更にカルバドス (フランスのノルマン
ディー地方で作られるアップル・ブランデー) のパルフェ、スティッ
ク状のものはグラッセ・タルト。

夜の仙台を眼下に見下ろす素晴らしい眺望とともに十分に美味
しさを堪能できた大満足のディナーだった。一流ホテルのディナー
とは、素材や味の美味しさだけでなく、使われている食器と料理
のマッチング、盛り付けなどにより、舌を楽ませるとともに美的
感性に訴えかけてくるものだということを実感した。

12月 12ヶ月のプログリレー
わたしの仙台ストーリー



御霊屋下から見たウェスティンホテル。



2日目『水の翼』の舞台を辿る

翌日は、小池真理子氏の小説『水の翼』の舞台を辿りながら散策。まずは瑞鳳殿の麓にある御霊屋下からトレース開始。伊達家の霊廟があるので厳かな趣を感じる。

杉林に囲まれた参道を抜けると伊達政宗の霊を祀る瑞鳳殿に。朝から訪れる人が絶えない。

その後は、紗江と東吾がお互いに恋い慕う気持ちを抑えながら訪れた老舗のお菓子舗「賣茶翁(ばいさおう)」へ。ここの「どら焼き」は開店と同時にすぐに売り切れてしまうという。私たちのように『水の翼』を読んで訪れる人も多いのかも知れない…。

小説『水の翼』のトレース・ツアーでお腹が空いた後は、お楽しみのランチ・タイム。

前菜は、真鱈とじゃがいものモッツァレラ・チーズ焼き、エビのホット・スティッカーなど…。

メインは、鶏のむね肉ともも肉のフリット。3種類のゴボウの添え物とトリュフが珍味。

お陰さまでとても楽しい時間を過ごすことができた。このたびのご縁に改めて感謝を申し上げたい。

最後にもう少し書き添えようと思う。

他県出身者でありながら、土地に惚れ人に惚れ、仙台に住むことにした私であるが、「仙台は暮らしやすい良いところだ。仙台が好きだ」という単純な思いとは別の思いも抱いている。

仙台を含む東北の歴史を辿ると、日本という国家の歴史が深く刻み込まれた京都や奈良には並ぶべくもないが、ここにも、兵どもが覇権という夢を命懸けで争った激しい戦と藤原氏三代や伊達氏に象徴される栄光の歴史、そして東北の長い冬に喩えられるような戊辰戦争後の永い忍従の歴史、忍耐強い人々の暮らしの積み重ねがある。東日本大震災の時にも見られた仙台を含む東北の人々の辛抱強さ気高さは、東北の厳しい気候風土の中で永い時間の積み重ねを経て培われてきたものと思われる。

仙台という街を、単なる一都市として観るのではなく、東北の中の仙台の位置づけを考えながら俯瞰的に観て、また過去からの永い時間の流れの中で今の仙台を捉えると、益々仙台という街に愛着が感じられるような気がするのである。(この感覚は他県から仙台に移り住んだものでないと理解できないかもしれないが……)